

淤岐ノ島（隠岐？）に棲んでいた白うさぎは因幡の国に渡りたいが渡るすべがない。海に棲む和邇（サメ）をだまし、「一族のありったけを連れて この島から気多の岬まで並んでくれ その上を走りながら 数えるから・・我が一族と 君ら一族のどちらが多いか・・」和邇はまんまと騙され、言ったとおりに並んだ。兎は数えながら渡ってきて、今一步のところで、「君たちはわたしに 騙されたんだよ」と言ってしまった。最後の和邇が私を捕まえ皮を裂き剥いでしまいました。痛くて泣き悲しんでいると、先に行かれた八十の神々が、「海の塩水を浴び 山の尾根に臥せっていると良い」と言われたが 私の膚は裂けてしまいました」という。八十（やそ）の神々のあとに通りがかったオホナムジは、赤裸の兎に、「すぐ 真水で体を洗い 水辺の蒲の穂を撒き その上に横たわれれば治るだろう」と教え、ウサギの体は元通りに治った。

「因幡の白兎」だと思っていたが、古事記では「稲葉の素菟」というらしい。この話は幼少のころから聞かされてきた、子ども心に、昔話だ、神話だ、とわかっていたが、これが古事記の話だとは知らなかった。古事記ということで、話はこんなに簡単には終わらない、前後にくっついている話があります。

オホナムジ（大国主命）の神話は、稲葉の白兎からはじまり、八十の神から何度も殺されかけては、母の助けで生き返り、母のアドバイスで根の堅州の国に行く。そこでスサノヲの娘、スセリヒメと出会い結ばれるが、スサノヲの課す様々な試練を乗り越え、葦原の中つ国に戻って、地上の王になる、古事記の中でも、もっとも波乱万丈の成長物語として語られる。稲葉の白兎の話は、やさしい少年というよりも、病気を治す力、＜メディカルシャーマン＞治療能力があるということが大事だった。

スサノヲの6代孫、オホナムジ＜大国主命＞の話：オホナムジには兄弟の神が八十余りもいた。その八十の神々はみな、稲葉のヤガミヒメを妻に娶りたいと思い、そろって稲葉の国へ出かけた。その時に、オホナムジに袋を担がせお供の一人に加えた。稲葉の白兎を助けたのはその道中。

八十の神々に妻問いを受けたヤガミヒメは、「オホナムジ様のもとに 嫁ぎたいと思います」と答えた。それを聞いた八十の神々は怒り、オホナムジを殺してしまおうと伯耆の国の山の麓に連れ出し、「赤猪を山の上から追うから 下で捕まえろ」と真っ赤に焼いた石を山の上から転がした。オホナムジは焼けた石に押しつぶされて死んだ。それを伝え聞いた母神は高天原に昇ってお願いした。＜キサガイヒメは焼けた岩にへばりついた骸を貝殻ではがし、ウムギヒメが母神の乳の汁に薬をまぜて焼けただれた体に塗ると、オホナムジは生き返った。＞八十の神々はますます怒り、オホナムジを大木の割れ目に入れると、またもや息絶えた。母神があらわれ、再度生き返らせた。母神はこっそり逃がし「スサノヲのいる根の堅州の国においでなさい」と告げた。

スサノヲのもとに行き、すぐのその娘、スセリヒメと結ばれた。スサノヲはオホナムジを、「蛇の室屋」に寝かせる、次の夜は「百足と蜂の室屋」に寝かせた。ふたつの室屋ともにスセリヒメの助けで難を逃れた。スサノヲは次に、矢を野原に射込みそれを探せと言って火を放った。ネズミがあらわれオホナムジを助けた。

ここからの展開が妙である。＜スサノヲは心を許し頭のシラミを取らせた＞＜スサノヲの頭に百足がいる＞＜オホナムジは眠っているスサノヲの毛を垂木に結んで、妻のスセリヒメを背負い、宝物の生太刀・生弓矢・天の詔琴（のりごと一祭具）を持って逃げた＞＜オホナムジはのちに稲葉のヤガミヒメとも子をなした＞

お前の持っている生太刀・生弓矢で八十の神々をやっつけ、葦原の中つ国を治めオオクニヌシとなり、我が娘スセリヒメを正妻として、宇迦の山（出雲大社の東北）ふもとに、宮柱を太々と突き建て、高天の原に届くまで氷木（ひぎ）を高々と聳えさせて住まうのだ、こいつめ。スサノヲの祝福を受け、オホナムジは、八十の神々を追い払い、「大国主」の神となって、葦原の中つ国を統治し、初めて国を作った。

来週、愛媛県伊予市郊外で展覧会がある。その初日に“トークイベント”が予定されている。今回の展覧会のテーマが“絵と建築空間”と設定されている。思えばまわりに“建築デザイン”を熱く語る人、“TV コマーシャル”を熱く語る人、たかがではあるが“名刺”を熱く語る人、そんな人たちがいたが「ふんふん・・・」と聞きながしていた。今になって、「しっかり デザイナーの方々の話を 聞いておくべき だった・・・」

絵ということで建築家に聞いてみた、Y氏は長い文章をくれた、その中に象徴的な一節があり紹介します。

◎建物の付加要素として「美術作品」を配置する場合。美術作品のイメージがあると、コラボレーションが可能なような気もしますが、どちらかといえば美術作品にスペースを提供するという感じで終わっていることが多く（私の場合も・・・）美術館とあまり変わらない関係のような気がします。「付加要素」という表現は、画家としてはどんなイメージですか？そもそも「美術作品」？<<この表現に、Y氏は建築空間における美術作品の存在性を疑問視する、存在するのが美術作品だけではない、建築空間に存在するあらゆるモノ、家具であり、機械であり、人であり、それらと同等の価値観で存在する。というよりも、空間そのものの一部である、空間である、というところに落ち着くのではないのでしょうか>>建築空間での美術作品が、「一体型」<<建築空間と美術作品がコラボしている>>は協調であったり格闘であったりします。「協調」とは格闘の結末をあとから評価した「結果」かもしれません。

◎格闘の例を一つ：大阪万博の「太陽の塔」「お祭り広場」が計画設計された時、スペースフレームの屋根の上に伸びていたのは、シンプルなタワーのような構造物でした。このタワーのデザインを任された岡本太郎は、計画のタワーのようなデザインではなく、異形な塔をデザインして屋根から突き出した。「信楽のタヌキ」のような模型を見た、磯崎新をチーフとする建築デザインチームはさぞかし驚いたのだろう、大ブーイングが出た。調整を一任された丹下健三も、最初は「ダメ」と言っていたようであるが、岡本太郎に押し切られたのか・・・「進歩と調和」の建築チームと「お祭り」の岡本太郎の戦いには、どのようなやり取りがあったのかは知りませんが、今となっては自明のように見える結果が、「格闘」の成果なのでしょう。ちなみに、丹下さんと岡本太郎は以前から都庁舎を始め多くの共同作品がありました。よく理解し合えた仲でこそその成果かも知れません。

建築家の友人たちからの手紙

◎我が家に飾る絵

★自宅に絵を飾る。すべての絵は、展覧会やパーティに出向き、画家と話し、知り合い、絵が気に入った、画家が理解でき気に行った、という気持ちになったとき、購入するそうです。（ピカソなど物故作家は会えませんが・・・）

★我が家の岡村作品について。岡村さんが「額をつけた方が立派に見える」私は「non」でした。額をつけると「絵」が「作品」になって飾ったようになってしまう。取り澄まして壁に鎮座するのがいやだったのかもしれない。一体となってインテリアを作るという意味では、額がない方がいい。この辺に、建築と美術の関係の「key」があるようにも思います。

★建ちあがった木造建築に入ると、いい香り、柔らかいぬくもり、白木の白っぽい色があります。月日が経つと徐々に薄い色に 四半世紀も経つと、あめ色に。あめ色がいい？できたばかりの白木がいい？家具ではほとんどが塗装、彩色されています。

★今日、近所の公民館に行きました。「へたくそな絵が飾ってある」と壁を見ていました。「一年前にもこの絵を この部屋で見た」と思いました。「絵を描きました どこかに飾ってください」「なら こちらに飾りましょう みなさん喜ぶますよ」これは大いに勘違い、こんな絵はどこがいい、だれが喜ぶ、下手な絵は公共の場に飾ってはいけません。欧米の映画を見ますと、古典劇も現代劇も室内は大きな絵が飾られています。有名無名は別にして、画家が描いた絵が飾られています。私見ですが、趣味で描かれた絵は公共の壁では見劣りします。昨今、障害者の方々の絵が脚光を浴びていますが、ディレクターが整理したものがいい。

二十歳代からの知り合い、建築家（デザイナーのこと）の山田さんと話をした、鴨川の河原、石の上に腰を落として話した。下を見るとそこにアオサギがいる、一步一步近づいてくる、いかにも親しげな様子で寄ってくる、「あれは みなさんが 餌をやるから・・・」「え 魚を」「いや パン屑のようなもの」「御所にもやってくる 餌をやっている おばあさんが」サギまでがパンにつられてやってくるということに驚いた、「ハトじゃあるまいし パンだぞ」と思って見ていた、アオサギ、長い首にも模様があるのかと思いながら。

「オレねえ いつも思う 最近の建築には 絵を掛けるところがない 飾る場所がない 最近のデザイナーは 隅々までデザイン してしまう デザイン し過ぎてしまう 美術品の飾る場所なんてない」こういつも思うんですよ。「そうなんです そのことを“協調”と“格闘”という言葉で 表現しているんです」「デザイナーが ヒトにモノに 協調してしまうと 挫折する だめになってしまう」「だめになってしまわないために デザイナーは格闘しなければいけない」「デザイナーが デザインもしないで 頼まれたとおりのモノ 拍手喝さいのモノを造って どうするの」建築とひと口に言っても、住宅であるとか、ホールであるとか、店であるとか。そしてそれが建つ場所、都会の真ん中とか、森の中とか、島の中とか。「そらあ たくさんの 要素が 制約が 約束が あるけれど」「頼まれた通りのものを造って どうするの」

この話を聞き終わって考えてみた。建築デザインの究極は、建造物が完成する、内装も外装も完成する、その段階でデザイナーの仕事は終了する、ピカピカの作品がそのまま在るのが一番いい。極端な話ではあるけども、本当は、建物が出来上がり、その翌日からその建物はスタートする。人が来る、家具が来る、荷が来る、車が来る。年月が経つと、汚れが出てくる、外の景観が変わってくる、木々の自然が育っていくのは素晴らしいことだけれど、日に日に建物が埋没していく、内装にいたっては、あらゆる雑貨が氾濫し、埃がたまり、傷がつき、色も変化する。これが素晴らしいことだ、経年変化は当然の帰結、これが魅力だ、アジだとは言わないよね。

「絵はどうですか」「その都度 描き始めるにあたって なにかテーマなり イメージなり・・・なんてありますか」と問われて考えた。テーマなり イメージなり、ということで考えると、長年、同じようなことをいつもしている。ただオレの場合、テーマなり イメージなりは同じものなのだけれど、そのあとの手法がいつも違っている。本人は至極当たり前のように同じ手法で進んでいると思っているのかもしれないが、違っている。以前、某画商が、「前と同じ絵を描いてくれと言ったのに これは全然違う これはだめだ」とぼやいていた。オレは同じつもりで進めていたのだけれど、確かに出来上がったものは前のそれとは違っていると並べてみればわかるのだけれど、まったく同じものを同じ手法ではできない、そういう方面の才能はなさそうである。商品として絵を描いている人、絵を納めている人は、1年5年10年と、同じ手法、同じ色、同じ感性を、保たなければいけない、そういう職人的が技術を身につけなければいけない。オレの場合、昨日と同じものができない、昨日と今日が違う、という感性、これが良いのか悪いのかわからないが、日々違っているということが、日々新鮮で、日々挑戦で、同じようにやっていけるのかもしれない。

石田君の展覧会を見た。白磁の抽象形態作品、それぞれはお猪口の大きさ、コップの大きさ、すり鉢の大きさ、鍋の大きさ、そんな大きさのもの、それらを作家の感性で赤い糸で繋いでいる。去年と今年は赤い糸で、その前はケント紙であったり、針金であったりしていたように思う。白磁のそれらの形と形を結ぶ赤い糸、これらの並べ方、同じ並べるにしる、横に縦に、上に下に、それぞれの置き方があり、それぞれの結び方がある。白く硬い塊と、赤い糸の緊張している、もっと暗い空間、もっと白い空間、ここのコンクリートと板の床、独特の世界が成り立っている。

オレは、「絵は 描き終われば終わり 筆をおいた時点で終わり あとのことは知らないよ」若いころからそう思ってきた。どこに飾りたい、だれに持ってもらいたい、そんなことは思わない、口も出さない。

「ホールを造ったので 展覧会しませんか」という西下さんの言葉から始まった今回の展覧会が明日の午前 10 時にスタートする。紅と二人で夜の 8 時に家を出た。高速吹田 IC 手前でガソリンを満タンに入れ一路西に向かって走った。「今日は天気が最悪だ 予報どおりに降るだろうね」。正月に展覧会の話があって、二月に会場の“三秋ホール”の下見に出かけたのは一番寒い季節だった。往路は瀬戸中央道、今回より早い時間に出発し倉敷に立ち寄り与島 PA で仮眠した。復路はしまなみ海道を使い、尾道から帰阪した。今回は朝の 9 時前には会場に着き、車に積んだ絵を飾る、飾り終わって展覧会が 10 時にスタートする、というハードスケジュール。初めての会場なので、絵の数が少ないとはいえ、一時間少しですべてが飾れるか、というような心配を頭の隅に起き車を走らせた。

「あ きたねえ 降ってきたねえ」ぽつりの雨が降り出した。オレは眠くならないように 6 時ころには飯をすませていた、紅は出る直前に風呂と晩飯をすませた。西に走る高速道路は、東に走るそれに比べ照明が少ない、夜は真っ暗な道路になる。大阪から伊予まで 4 時間半のコースタイム、「与島で寝るならあとは 2 時間 石鎚で寝るならあとは 1 時間」と話しながら、2.3 回軽く P で休憩をとった。雨はやむこともなく降り続けた、「雨の中で 荷を移動して寝床を造るのは いやだねえ」と話しながら「余裕があるから 与島で寝よう」と車を止めた。

会場の建物、社長が「三秋ホール」と名付け、普段は、社長室だったり、社員の集会所だったり、時には何かの会合やイベントに使用されているそうだが、今回すべてを取り払い片付けていただいている。画廊としての、絵を掛ける仕様としての設備がない、「ピクチャーレールはいやだ」と建築家がいわれるらしい。目線の高さに錆びた鉄の棒が壁についている。「？」先生の苦心の策のようだ、「これなら、絵がないときでも壁のじゃまにならない」とおっしゃるそうだ。前にも思ったが、建築家は手塩にかけた建物が出来上がった、作品ができた、これで終わりたい、人もモノも中に入れてもらいたくない、「何も入れない空間だけがいい」というのが本音だろうね。このレールを見て、「おお素晴らしい よくまあ手間をかけて 考えたねえ」とは思うが、使い勝手が悪い、オレ以外の人に来て、「これじゃ平面作品が飾れないよ」とブーイングが出そう。ただ、本当に、この建物は、さまになっている、素晴らしい空間だ、じっと座っているだけで心豊かになっていく。“建物を使う”ということ、“そこに居る”ということの違いだね。

朝 6 時に与島を出発、四国に入り、瀬戸内沿いの高速道路を西へ走る、雨の降りが徐々におさまってきた。運転しながらパンをかじり、紅茶を、コーヒーを飲んだ。前に来た時も共栄木材を通り過ぎ、引き返した。峠のてっぺんに立つ建物、その壁にローマ字で会社の名前が書いてある、なかなか読みづらい。朝 9 時前に材木工場敷地内に入った、間に合った、疲れているはずだが心地いい緊張のせいか、心うきうきしている。西下さん、建築士の息子さんと日本画出身のお嫁さん、東京芸大で知り合ったご夫婦だそうである。みなさんに手伝っていただき 10 時にはすべての飾りつけが仕上がった。

並べ終わって 自分の絵を眺めてみる、我ながらいい景色とご満悦。今回はこの 4.5 年に描いた絵を並べた、お気に入りを入りを並べた。すこし前までは自分の絵に対して否定的だった、「よくないねえ 才能がないねえ だめだねえ」と常々思っていた。売れっ子の連中の絵、賞をとる連中の絵、そういう彼らの絵に比べ、独創性がない、整理がされていない、洗練されていない、ただ闇雲に描きつらねているだけ、描きこんでいるだけ、と思い悩んでいたが、いつの間にかオレ独特の、独自の世界が広がってきた、できてきた。「おお 描けるようになってきた」とほくそ笑むと同時に、昔の、よくない、悪いと思っていたころの絵も、「あれはあれでよかったのだ うまくいっていたのだ」と思えるようになってきた。七十歳になって、やっと、本当にやっと、喝采が叫べる絵が描けるようになってきた。今回の展覧会、写真で分かるように、壁はどろ壁色、黄土色の土壁とは違うが、それに近い色。床も何年か経った畳の色、所々に入っているラインが、畳の縁に見える。天井はカラマツ材をのこぎり で引いたままの板の材料が曲面に貼ってある。大いに和風を感じさせる会場だ、「絵が 和風に見えますね」と声が聞こえる。

ポツリポツリとお客さんがおいでになった。過疎地の材木工場にある会場なので、車でしか来られない、伊予市街地から10分、松山市街地から30分だそうだが、もちろんこの数字は、徒歩ではなく車を走らせてである。オーナーの西下さんが58歳、建築家の息子さんが30歳前、来ていただく方々も若い。先日の大阪での個展で「岡村さんの展覧会は 老人会 みたいですねえ」と口の悪い知人の弁、なれど今回の展覧会は、若い方から老人まで、この傾向はうれしいねえ。本日は4時からトークイベントがある、たくさんの方が来るかなという思いと同時に、交通費ぐらいの売り上げがあればいいのだがと皮算用。ガソリンと高速道路で25000円ぐらいはかかるねえ。

「トークイベントの呼びかけを 新聞社に言ったのですが 記事が載ってなくて・・・」新聞に載ればいいかと期待はしていたが、残念である。トークイベントが4時から始まった。オーナーの知人、15人ぐらいの方々がお集まりいただいた、腰かけて対話形式でお話するにはちょうどいい人数かもしれない、と思いながら、紙芝居を出していつものように始めた。この紙芝居、以前、茨木市の人権講座に出席した折、講師のチョン先生より教わった。「会議だ 集まりだ と世の中にはたくさんの行事がありますが ほとんどが無駄で退屈」チョン先生の講義はシリーズで何回か続き、オレの琴線に触れ、人生を変えさせられるぐらいにためになった、いい話だった。「ひとが集まれば 集まった人それぞれが 満足して帰る 出席した方々の1時間2時間 よくぞ出席した 満足したでなければ」「それには 全員参加 全員が 話す 聞く 通じ合う それが大事」オレの初めに行う紙芝居形式の自己紹介は、絵で名前、日頃の行動、趣味、絵の仕事の話、などを織り交ぜ、みなさんの意見も聞きながら進めていく。今日オレに初めてお会いした方々も、硬い表情が崩れ、軽口も出始める。「次は みなさまの自己紹介と なにか一言 絵の話 建築空間の話 何か楽しいこと 嫌なこと ちょっと言いたいこと なんでもどうぞ・・・」俄然、順番にみなさまは話し始める。ポケットに入れたICレコーダーのスイッチを押し忘れ、ほとんどの会話がオレの頭の中から飛び散っている、みなさんの熱気だけが残っている。5時に終わり、西下さんから食事を誘われていた。「今宵の 伊予プリンスホテルのそばなのでまずチェックしてください すぐに追いかけます」連れていただいたのが、楽しそうな店、フグの専門店“まき”だ。湯引き、テッサ、鍋、ビールがうまい、最後におじやをいただき、ごちそうさまでした。

翌日は昼前に、25年ぶりに会う浜口さんが来てくれ、1時間ほど話した。高地出身、海のそばで生まれた彼、鹿島建設の設計部を10年で辞め四国に腰を落ち着けたらしい。松山で建築設計の仕事を受け、面白い話、好かれた話、嫌われた話、武勇伝やら、情けない話やら、次々と出てきた。それからしばらくすると、我が孫のもう一人のおじいさんである、石田さんが来てくれた。東京在住の石田さんは、愛媛県宇和島の出身で、たまたまこの時期に高校の同窓会があるというので、寄っていただいた。同窓会の本会は松山市であるそうだが、「多くの連中が 宇和島から松山に移り住んで 松山の方が多いい」ということだそう、いつも同窓会は松山に泊まり、そこで同窓会をするそうだが、今回はその前に、妹家族と会う、宇和島在住の同窓生と会う、それから松山というコースらしい。「伊予で食事でも」という話から、「いっそ 宇和島で」と話がはずみ、車を宇和島まで走らせた。高速道路ができて、伊予と宇和島は1時間で行ける、石井さんの昔話、兄弟の話、宇和島の話聞きながらすぐについた。2時という時間、簡単に甘い処で食事をごちそうになり4時に分かれた。たっぷり3時間、話ができて、本当に良かった。宇和島を4時に出発、寄り道がしたいとは思いますが、疲れている、連日の睡眠不足、慣れない人との会話、そのまま高速道路を走り続け、帰宅したのが11時前だった。

オレ、自分の絵の話は好きじゃない、「どんなに苦勞をして描いているか なにを狙って描いているか そういう苦勞話 感動話 人の気持ちにくすぐる話 自分の作品をこよなく愛している話 嘘でもいいから言わなきゃ ビックにはなれないよ」とよく言いかけられますが・・・。「そらあ 絵を描くのは楽しいよ 何枚でも 描き続けたいよ」「だけど 説明はないよ 絵の説明も 描くことの説明も 生きていることの説明も」「絵は 描くよ 出来上がった絵はオレの燃えカスだ」「そらあ あかんわ 絵が オレの燃えカスだなんて」

☆夕方方の6時に家を出発。太陽に向かって走っている、西日が白く眩しかったのが、7時ころになってくると山に沈む夕日がオレンジ色になってきた、夏至の季節まであと一カ月、日が長くなってきた。

☆8時、備前あたり。先週の絵の搬入の時には家を8時過ぎに出た、今日は2時間以上早い出発だ。9時に与島に着いた。「ここで寝よう 眠くなってきた 明日 早く出ればいいじゃないか」暴走族の車が集合している、次から次やってくる、「あばれないでくれよ」「酒を積み忘れた」

☆朝5時に目覚めた。睡眠剤を飲んだのでぐっすり眠れた、今回はこれを忘れたが、今回はこれで快調だろう。軽トラックの荷台に、“山テン”を積んで寝ているヤツ、車の外にスリッパをそろえて寝ているヤツ、おかしいねえ。

☆昨日から石鎚山を調べていた、どこから登ろうかと考えていた。面河溪谷<国民宿舎面河>と土小屋<国民宿舎石鎚>のどちらかを考えていたが、ともに松山方面から反時計回りに石鎚山を回りこむようになっている。途中のパーキングでトイレ休憩、ナビを入れると、次の“川内IC”で高速を降り5キロほどバックして山に向かうようになっている。「よしいけ」「面河」の道路標識が出てきた、陽がさしている、緑がもえている、ワクワクの山びよりだ。

☆「面河から登ろう」と思い込んでいたが、「うんうんの 登り」を考えると弱気になり、土小屋まで車を走らせた、道はどんどん上へ、これは高度が稼げる、みなさん来るわけだ。駐車場にはたくさんの車が停まっていた。

☆1時間登った。ピンク色のつつじ、白い木の花、1500Mを超えたこのあたりはまだ樹々の若葉は萌えだしたばかり、青空には雲ひとつない。

☆山頂に着いた、おにぎりを食った。ほら貝の人、山登りの人、神主さん、かすかに雲が出てきた、四国は遠く霞んでいる、“インヅチサクラ”という名の桜の花がまだ咲いている、所々に雪の塊。岩には崖には、鉄のわっぱが鎖が修験者の業のように絡みついている。北北西かな、なかなか立派な山が近くに見える。この辺りの人「あれは ○山」とすぐには出てこない、四国の山はなかなか立派だ。

☆先ほどから火山弾風の岩が所々にある、このあたりは大昔に大噴火があったらしい。伊予ということで、伊予市以外に遠く離れたところも「伊予」という字がついている、「伊予とは・・・」と調べると、“伊予の国”は今の愛媛県全体のことらしい。また伊予の“ヨ”は“ユ”に通じ“湯”のことらしい、温泉の湧く国らしい。

☆下っている途中に白装束の団体「おくだりさん」と挨拶してくれる。「オレ なんと返事したらいいのですか」と聞いてみると「おくだりさん に対して おのぼりさん です」とおっしゃる。当たり前の話だが、その言葉は素直に出なかった。そのうちに、紫の衣を着たひげの爺さん、やはり、「おくだりさん」と言ってくれた。紫色の衣に意味があるのかどうかは知らないが、白装束の一派でしょうね。袴は黄色や褐色もあった。「南無阿弥陀仏」と怒鳴っていた方々もいた。

☆ブナの大きな木がある、幹の胴体が独特の模様、解説文がある。「ブナの果実は 人も食べられる 動物も食べる 5~7年に一回豊作年がある、ブナの実は知らなかったね。木に“みずなら”の文字、「ああ この木か」名前が書いてあると親しく呼びかけられる、ほかの木の名前も、草の名前も覚えたいねえ。土小屋まで降りてきた、標識に標高1500Mとなっている、500Mぐらい登っただけだがなかなか満足ない山でした。

☆時間は3時前、「これからどうするべ」と思案した。風呂・ガソリン・酒・あて一品・今宵のねぐら、まずはひとつづ片付けなければと坂の途中に湧水が出ている。いっぱい飲んで、「うまい」ペットボトルの水道水を捨て湧水を入れた、山の帰りの水は旨いねえ。道をそれ、面河に行った。この景色はすごい、溪谷の名に恥じないそそり立った岩、流れる水は透き通っている、前にも来たがその時は雨でこうも感激しなかった、すごい景色だ。国民宿舎はまだ開業時期ではないのだが売店はやっている、爽やかなお姉さんがいる。「立ち寄り風呂はないですか」「ここから30分のところにありますよ」ソフトクリームをぐるぐる巻き、おっさんに渡した。山の恰好をした人だ「ここから登られましたか」「いや 土小屋から登って ここに降りてきた」とソフトをなめながらの返事、「ソフトもいいかな」と思ったがやめた。風呂は松山への帰り道にありそうだと走っていると“日帰り温泉”の看板がある。「ここでもいいや」と車を止めたらなんとそれが目的の<国民宿舎古岩>である。「入れますか」「どうぞ」400円也を払って中へ。昔から風呂は早い、温泉でも10分で行ってくるが、ひざを痛めてからは、スパッツ、タイツと脱ぐのに手間がかかり、「風呂はじゃま

くさい」と思うようになった。サッと入り、サッとつかり、サッと洗い、サッとつかり、着替えて出てきた。

☆松山に向かって走っていると、左折も松山と書いてあるのでそちらを進むと工事中の高速道路の一部開放でスイスイ走れる、あっという間に砥部に着いた。人のいるガソリンスタンドがあった、「空気圧 見てくれますか」先日セルフのスタンドで、自身で測り、少し抜いた、「ぬき過ぎたんじゃないのかな」と不安だった、「これで じゅうぶんですよ」とあんちゃん言葉に安心。石鎚山に回ったのでガソリンが減っている、ガソリンの高いのはいやですねえ、我がぼろ車、最近はいくら食うのかは測ってはいないが、10Kか12K/1L ぐらいしか走らないだろう。砥部から松山はすぐ、伊予もすぐのようだ。松山をウロウロしようかとも思ったが、時間は夕方になってきている、まっすぐ伊予に行こうと走らせた。スーパーがあったので買い物、うまい魚でもと思ったが、時間的に旨そうな魚はない、トマトも他県産、ビールとカップ酒、なんといつものアジフライ、これには我ながら笑っちゃうね、といいながら双海の道の駅に向かった。

☆「まだまだ時間がある どうして時間をつぶそうか」と思っていたが、陽が沈み、もうたそがれ時になっている、こうなれば10分20分で暗くなる、海岸には人がまだ遊んでいるが、海の景色は夜を迎える少し前の、青のような、紫のような、ピンクのような、不思議にかすんだ色、ぼおっと時間が経っていく。

☆「もう やってもいいねえ さあ 飲もう」プシュリとビールを開けて乾杯。出発するときに「忘れ物はないねえ」といいながら いつも何かを忘れるねえ」と独り言だったが、高速に入って、「酒を積み忘れた」と気づいた、「えらいことをした 酒を忘れた」と叫べども、高速道路の売店には酒は売っていない。いや売ってはいるが、土産物の日本酒四合瓶ぐらいしかないが店は閉まっている、なので昨夜は飲まなかった。アジフライを食いながらあっという間にビールが終わり、カップ酒に移った。300MLと書いてある、「おお これはいい 一合半ぐらいあるのだ」ちびりちびりと飲んだ。コンロに火を点け、ラーメンに、わかめ、ネギ、菜をいれた。美食家ではないオレにはこれでじゅうぶん、「旨い 酔った」

☆道路を散歩した、西に向かって少し歩いた、車がビュンビュン通る、この海岸線道路、みなさんスピードを出しますねえ、怖いですねえ。海を見ると真っ暗、漁火もない、遠くの島の灯りもかすか、静かな空間だ。

☆先日画廊で会った人の話。山口県大島あたりの漁師が、時化に会うと四国のこの辺りの山を目指して漕ぎ進み命が助かったことが多かったという。そういえば海岸からすぐ近くに山が高くそびえる、1000M ぐらいの山が連なっている、それを目指せば助かるわけだ。なので毎年、山口県の漁師が、山の上の神様に、「お礼参り」にやってくるという話を聞いた。大島郡はオレの母方のじいちゃんの里だ。父方のじいちゃんの里は熊毛郡平生だ、ともにほとんど知らないが。

☆朝は7時ごろに目覚めた、やはり睡眠剤のおかげでよく眠れた、顔を洗い、パンを食い、山の服装から展覧会のおしゃれ服装に着替え、革靴を履いた。時間があるので港のほうまで行った、漁船がたくさん止まっているが、市場には魚の姿は見えない。漁はいつするのだろうか、沖の方で一本釣りの小型の船が何隻か、タイ釣りがねえ、釣れるといいねえ。テトラポットでおっさんがうお釣り、よくまああんなところまで海に落ちずに行くねえと感心。最近どうもオレは運動勘が鈍っている、突堤でも、山でも、険しいところは近づきたくなくなっている、「ま 安全第一 山を楽しもう 旅を楽しもう」沖の売店で煮魚の弁当500円で買った。

☆今日は10時から5時まで展覧会の店番なり。この展覧会、残念なことは観客数が少ない、DMを送った方しか来ていただけない、西下さんもたくさん送っていただいたようだ。オレも何人かには送った。知りあいで、「へええ よくまあこんな遠いところまで」と驚く人も来てくれた。

☆もしまた次回も展覧会ができるなら、1日か2日間ぐらいがいい、その間ずっとオレは常駐する、絵を持って行って持って帰るのがいい。ここの土地がいい、山がいい、池がいい、空間がいい、壁に絵が映える、気持ちがいい。

☆5時になった、終わった、片付けよう、積み込もう、息子さんに手伝ってもらって絵を片付けた。5:30手を振ってもらって一路大阪へ。帰りはわがままを言って、今治を通りたいとナビを入れた。松山市内は多少渋滞気味だが、すぐに海岸線に出た。双海の海に比べ島影がたくさん見える、四国の景色はいいねえ、帰りついたのは11:30だった。

☆「がけ崩れのため通行止め」の看板。「あれれ」看板には人も自転車も行けませんかと書いてある。今日の目的の山は御池岳、鞍掛トンネルを出たあたり、三重県側から登れば、なんとか行けるだろうと思っていた。トンネルの手前からは、斜度がきつく嫌がられそうなので、トンネルを出てすぐの駐車場に車を止めて登ろうと計画していた。

☆どうしよう、手前の高室でもなんて思案していると、おっさんがひとり降りてきた、山の恰好である。「ここから登れるのですか」「うん行けるよ 右へ曲がって 左へ曲がって」「地図持ってきます」「ああ」と地図の裏の白紙に書いてくれたが要領を得ない、とにかく行けそうだということで登ることにした。

☆1時間ぐらい登った、ピンク色の標識が付いている、今から思えばそのピンクは鉄塔工事関係者のものだったのかもしれない、国土地理院の地図にも今回のルートは載っている、そこから、お池に向かって伸びているが距離は長い、高度差もある、好きものが登っているようだ。杉の植林の間に自然木、太い幹、朽ちているのか生きているのか、神が宿りそうな木、白い岩が、このあたりは石灰岩の山だ。雨は降りそうで降らない、山がいい雰囲気になってきた。

☆鉄塔まで登った。「さあ ご飯 私たちはここまで まってます」いつもたくさんおやつがいただける、登山靴に履き替えてすぐにまんじゅうを、歩きだしてまた別のまんじゅうを、ご飯になると、玉子焼き、てんぷら、サラダといただく。パイナップルとメロンはまだ凍っている、「帰ってくるまで 食べるのを 待ってるよ」「それでは わがままながら ちょっと登ってきます」二人を置いて出発。踏み跡がわからない登山道、赤いテープが所々、とにかくここがどこかわからない、さっきの鉄塔がどれなのか、地図には並行して高架電線が書かれている。標識が全くない、鉄塔にもその名称は書かれていない、「ま いいか 赤いテープは所々にある 磁石はある 地図もある」「迷いませんように」と願いつつ、「どこか ポイントになるところまで どこか一つのピークまで」と登り続けた。1時間足らずで開けた台地に出た。向こうにポコリ大きくピークが見える、地図に載っているもう一つの鉄塔が見える、ソフトボールができそうな開けた場所、風がきついのか曲がりくねった木、気持ちのいい場所だ。

☆かえって詳細に調べてみると、大君ヶ畑から鉄塔を経て一本木に登ってきたようだ。四半世紀前の文章<オジバタ→一本木→鈴岳→御池岳>大君ヶ畑から、一本木(桜峠)、鈴岳南面を回り御池岳への山道が記されている。

☆二人が待つ鉄塔への帰途についた。この辺り、ねじれた木の幹にも、白い岩にも茶色い苔が付いている、乾燥して枯れかけた森だがひとたび雨が降れば苔の緑が復活するのだろう。

☆ベチャリとした黒い糞、だれのだろうね、子どものこぶしぐらいの大きさが何か所かある。猪にしては量が少ない、くまなら子熊か、だれだろうね。

☆下にちらりと目的地の鉄塔が見える、北に向かって下ればいい、藤の花が咲いている、つつじもあった、鉄塔のところに見たことない花、<マルミノヤマゴボウ：今判明>。「ほっほっほっ」この鳴き声はハトだと思っていた、山にもハトが多いのだと思っていたが、「あれ フクロウ」だという、「知らなかった 姿を見たことがない 見てみたいねえ」と見渡せど姿は見えない。「かっかっか」ゲラが木をたたく音、こいつの姿は何度か見たことがある。

☆先ほどからの木、苔むしたけったいな木、「どうも これは ブナじゃないの」上のほうではわからなかったが、下ってくると木の幹の模様がブナの特徴、白と、グレーと、茶緑と、その胴体に苔が付いている。上のほうでは白い斑点は見えず、グレーに茶色い苔だったのでわからなかった。この辺りは太いブナはない、若木の細いもの、風がきついのか幹も枝も曲がりねじれている。

☆「ええと こっちな 赤いリボンが見えない あった」磁石を手にまわりを見渡し、目を凝らし、鉄塔に帰ってきた。パイナップルとメロンをいただいた、旨いねえ。さあゆっくり下りましょう。

☆「登り口にあった わらびを取って帰りたい」「さあ 着きましたよ」先ほどまで声がしていたのに、なかなか来ない。「あへび」彼が逃げるのを追うと、木に上手く登っていく、幹の裏側でピタリ動かなくなったが、細い木なので頭以外はよく見える、じっとしている、こんな姿は初めて見た、しばらく見ていた。

☆もう下山したと安心していたら、二人がゆっくりやってきた、滑ってひねったらしい。「ゴメン 知らなかった」消炎シップ、痛み止め、「なんとか歩ける 登山靴を脱ぎたい」軽い怪我でよかった。「わらび たくさんとれたよ」元気よく車のところまでこられた、途中でスリッパを買い履き替えられた。もちろん、恒例反省会もあった。